

## Abstract

**La révision de l'enseignement du FLE à l'aide de l'ordinateur multimédia**

Tetsuya Kumamoto et Toshiya Tsujino

La situation actuelle dans les universités japonaises est en crise et exige une réflexion sur la didactique du FLE qui peut s'effectuer en peu de temps. Cette méthode utilise l'ordinateur et le CD-Rom qui est un moyen simple et universel par rapport aux méthodes de " Call " .

Basés sur cette idée, nous avons réalisé la méthode du " Cadrage " qui donne aux étudiants l'occasion d'utiliser un CD-Rom hybride original. " Hybride " veut dire ici que le CD-Rom contient aussi des éléments " audio " .

Nous avons utilisé cette méthode dans trois universités des niveaux de langue et des motivations très différents. Au bout d'un an, nous pouvons constater que l'usage du CD-Rom a été accepté par les étudiants au fur et à mesure de temps. Mais il nous reste à penser comment améliorer la relation entre nos deux médias, le " texte " même et le " CD-Rom " . Cependant notre tentative qui n'est qu'un premier pas propose un usage nouveau de l'ordinateur multimédia dans la classe du FLE.

## マルチメディア外国語教育の再検討

### —フランス語初級文法教科書『カドラージュ』<sup>1</sup>の試み—

熊本哲也・辻野稔哉

#### はじめに

近年の大学改革の中で、第二外国語としてのフランス語は、履修単位の削減あるいは授業数の削減といった傾向が続いており、こうした現状に対する危機感は学会でも様々な議論を呼んでいる<sup>2</sup>。従って、大学教育全体の中での語学教育という問題は、我々現場の教師にとって大いに議論すべき課題であるが、翻って現在直面している危機的な状況の中で、いかに魅力ある授業を行ってゆくかということも緊急の課題である。すなわち、従来よりも少ない授業数のクラスでどのようなカリキュラムを組むべきなのか。授業外での学習についてどのように指導すべきなのか。といったことが改めて問題となっている。

語学教育の分野では、以前よりマルチメディアを用いた授業についての様々な試みや研究が行われ、eラーニングシステムを備えた大学も増えてきている。こうした取り組みが語学クラスの授業を補い、あるいはより効果的なものとする方向で工夫されていることは言うまでも無いが、一方でこうした取り組みの多くが大学ごとの独自のシステムに基づいた利用法を前提としていたり、大規模な設備や機材を完備した上で運営されているものが多いというのも現実ではないだろうか<sup>3</sup>。

こうした現状を考え合わせる時、大規模な改革は不可能でも少しでも現場の授業環境を改善する為に、よりシンプルで汎用性の高いマルチメディア教材が必要なのではないかと考える。以下は、このような発想から作成されたCD-Rom 付属のフランス語の初心者向け教科書『カドラージュ』を用いた試みの報告である。

#### 1 フランス語初級用教材の現状

国内で製作されたフランス語初心者・初級者向けの教科書を教材という観点から見ると、様々な問題点があることに気づかされる。

まず、教科書内容を聞く為の音声教材は、つい数年前までカセットテープが主流であった。カセットは教室で教師が使用する分にはさして問題は無いが、もう何年も前から学生のライフスタイルにはそぐわない媒体である。近年ようやくCD 添付の教科書が主流になってきたが、それでもこの両者には共通の問題点がある。それは、特に聞き取りが十分にできない初心者にとって、早送りや巻き戻しを繰り返しているとどこを読んでいるかが分からなくなる、という点である。これには、CD のもう一つの欠点である99トラック問題が関係してくる。CD には規格上、最大99のパート（トラック）しか設定できない。従って、語学教科書の細かい例文や問題一つ一つを1トラックとして録音することなど無理な話で（これを行うと添付CDの枚数が増えて、教材として使い勝手が悪くなり、また出版という観点から見ても採算が取れなくなるだろう）、いくつもの例文や問題文を一つのトラックの中に収録することになる。すると、トラック途中の文章の繰り返しなどは面倒になるのである。

次に最近多くなってきた教材としてビデオ教材が挙げられる。これは、実際にフランスに取材したも

のなどが主流で、学生の関心を惹き、学習への意欲を増すという点では有効であるように思われる。しかし、語学教育的な観点から見ると、今のところビデオは教室で全員で見るものに過ぎず、理解できなかった所をじっくりと繰り返し見るといった使用法には向かない。また、製作面から見れば、ビデオ製作にはかなりの費用、時間を要するし、社会の変化（例えば、フランからユーロへの通貨単位の移行）による改訂が必要になった場合の対応の難しさなどを考慮すれば、簡単に着手できる教材ではない。

そこで比較的手軽に製作可能な CD-Rom や DVD といったメディアが注目されよう。実際、CD-Rom 付きのフランス語教科書は毎年少しずつではあるが増えている<sup>4</sup>。しかしながら、現在数社から刊行されている教科書に添付されている CD-Rom や DVD は『カドラージュ』を除いてほとんどが Windows 専用であり、大学での使用機器が限定されたり、個人の使用環境で使えない場合も生じる。さらに、これらの媒体をどのように使うのかといった点についてはまだまだこれからといった状況であり、今後の研究が待たれるが、その一つの試みである我々の教科書について、どのような工夫を行ったのか以下に述べて行きたい。

## 2 『カドラージュ』における試み

### 1) HTML によるオーサリング

我々が意図した CD-Rom 教材は、紙媒体の教科書本体から独立したものではなく、あくまで教科書の内容理解を補助する為の教材である。例えば、時間数の少ないクラスで不足しがちな発音練習やフランス語の綴りの読み方の練習。あるいは簡単な確認問題や教科書本体の練習問題を予習する為のヒントなど、学生の自習の手助けとなる教材を、コンピュータさえあればいつでも、どこでも利用できるという環境を目指したのである。

この「いつでも、どこでも」という表現には若干の注釈が必要かも知れない。すでに述べたように、現状では多くの同種の教材は Windows 上で動作するプログラムを用いており、これでは機種を限定することになりかねない。我々の CD-Rom では、オーサリングに HTML を用いたことが大きな特徴の一つである。すなわち、プラットフォームに依存しないシンプルな HTML で全体を記述し、どのような OS の利用者であろうと、Web ブラウザさえあれば簡単に利用できるようにした。この際、Word からの書き出しや特定のホームページ作成ソフトを使用せず、汎用 HTML エディタを用いて標準の記述を心がけ、できるだけブラウザ間の表示誤差も少なくなるように努めた。こうしたことによって、利用者はもとより、指導者も新たな操作などを覚える必要が無く、これまでのインターネットのブラウジングと同様に簡単に教材が利用できるのである。

さらに、HTML を使ったオーサリングの大きな利点として、利用者のコンピュータに新たなソフトをインストールする必要がないという点がある。このことによって、公立の図書館やインターネットカフェなどでの使用も可能となるし、大学等での使用もはるかに容易となる。近年はセキュリティの観点から CALL、視聴覚教室などの単純な利用に際してさえ様々な制限があることが多い。特に非常勤講師先の大学では、これらの機器に新たなプログラムをインストールして使用することは、たとえ可能であっても抵抗感を覚える教師が多いと思われる。従って我々は、HTML によるオーサリングの表現力の限界を意識しながらも、それ以上のメリットが十分にあると考え、この方式を採用したのである。

### 2) ハイブリッド CD

次に我々の教材の特徴として、単なる CD-Rom ではなく、通常のラジカセなどで音声 CD としても利用できるハイブリッド仕様としたことである。これは、製作の準備過程でいくつかのクラスで試作品を

利用してもらい、アンケートをとって学生のニーズを検討した結果である。問題点としては、我々の教科書を利用する大学一年次の学生の場合、自宅にコンピュータを持つものが思いの外少数であるという事実。また、大学のコンピュータルーム等が利用できるとは言え、わざわざこれを利用するのは面倒だという感覚が一般的で、気軽に教科書の発音が聞ける従来の音声 CD も必要だと言う声が多かったことである。従って、コンピュータ用と音声再生専用の二枚のディスクの添付という構成にすることが検討されたが、出版社との交渉の過程でコスト的な面からやや無理であることが判明。苦肉の策ではあったが、一枚のディスクにコンピュータ用のファイルと音声再生専用のデータを同居させたハイブリッド仕様となった。

これは、本教材が CALL 教室などでの授業で常時使われることを意図したものではなく、むしろその補助教材、予・復習用として発想されたものであることと主な関連があるが、学生の側のモチベーションの問題とも関連していて興味深い。我々は、実際の製品版を用いたアンケート調査の分析において、この点に再び言及することにしたい。

### 3) ページレイアウトと発音

前述のように、音声 CD としての部分では99トラックという限界があるため、従来と同じく複数の例文をまとめて1トラックにまとめて収録するという形式をとった。一方コンピュータで使用する画面では、フランス語の例文一文につき一音声ファイルの対応を原則とし、教科書と同じようにレイアウトされた画面にクリックボタンを表示して、眼で見て聞きたい文章をすぐに聞けるようにした。同様に、動詞の活用や図表で示した語形変化などに対しても、すぐ横にクリックボタンを表示するようにした（音声ファイルの総数は400を超えた）。これによって、簡単に反復練習が可能となり、また綴りや図表を意識しながら発音を聞けるようになった。

### 4) 多角的学習への工夫

各課はそれぞれが一つの画面となる四つのファイルから構成されている。一つ一つの課について「基本画面」「発音関連画面」「練習問題画面」「Exercices 連動画面」という四つの画面（ファイル）を用意し、それぞれを切り替えて使用する。「基本画面」は教科書と同じレイアウトを採用し、「書き込みの無い状態」での発音練習や文法の確認などに使用する。

「発音関連画面」はそれぞれの課ごとにテーマを設定し、フランス語の綴りと発音の関係に集中して練習を重ねる為の画面である。例えば、動詞語尾の -ent を全て赤く表示して、これを発音しないことを意識させる、といった具合である。こうして、同じ例文を使いながら異なる観点からの理解を促すことによって、授業ではカバーできない説明や練習ができるように配慮した。次に、ゲーム感覚で文法などを復習できるよう Javascript による「練習問題画面」を設けた。具体的には、その課で学習する文法事項を簡単な3択や4択のクリック式の問題にし、正解・不正解を即座に返す仕組みである。キーボードからフランス語を入力する方式も一部取り入れたが、アクセント記号などの問題があるためクリック式を中心とした。最後に「Exercices 連動画面」には教科書本体の聞き取り問題を収録し、音声 CD によらずに何度も繰り返して聞き取る練習ができるようにした。またここには、教科書の和文仏訳問題の答えを音声のみ収録し、仏訳のヒントまたは聞き取り問題として活用できるようにした。

このように、教科書本体に収録された文章や単語を基本にして、これを多角的観点から学習する為に、紙媒体とは異なった情報や簡易的なインタラクティブ性を持たせ、基礎的な事項を確実に習得してもらおうというのが本教材の学習上の狙いなのである。

### 3 使用したクラスでの反応

以上のような教材として一応の完成をみた『カドラージュ』がどのように学生に受け入れられるかを調査する為、筆者達が常勤および非常勤として初心者向けフランス語のクラスを担当する三校において、2005年度の年間を通じて『カドラージュ』を使用し、各種アンケートを行った。三校の内訳は、A.公立の女子短大、B.国立4年制大学、C.公立4年制大学の三つ（以下順にA,B,C大とする）である。なお、各大学のクラスの状況はA大が半期必修（後期は自由選択）、週1コマのみのクラス、B大は必修、通年クラス、週2コマの内の1コマ分（文法クラス）、C大が必修で、週1コマのみのクラスである。また授業形態であるが、A,B大では基本的に普通教室の授業が通常で、A大では前後期各2、3回の授業でコンピュータ実習室でCD-Romを使った授業を行った。B大では前期に1度CD-Romの使用法説明などをCALL教室で実施したのみである。C大では年間を通じてCALL教室で授業を行い、適宜添付のCD-Romを使用した。

まずここでは、同じように普通教室を利用したA大とB大との比較を見てみたい。

#### 使用頻度：A大学 CD-Rom 使用頻度

Rom使用頻度	1 しばしば使用した	2 時々使用した	3 あまり使用しなかった	4 全然使用しなかった	計
2005前期	5	10	29	14	58名
	8.6%	17.2%	50.0%	24.1%	100.0%
2005後期	5	22	14	7	48名
	10.4%	45.8%	29.2%	14.6%	100.0%

#### B大学 CD-Rom 使用頻度

Rom使用頻度	1 しばしば使用した	2 時々使用した	3 あまり使用しなかった	4 全然使用しなかった	計
2005前期	1	15	13	6	35名
	2.9%	42.9%	37.1%	17.1%	100.0%
2005後期	0	6	19	6	31名
	0.0%	19.4%	61.3%	19.4%	100.0%

Aでは「しばしば・時々使用した」が25.8%から56.2%へとほぼ倍増しているのに対し、Bでは逆に45.8%から19.4%へと大きく減少している。これをAudioCDとしての使用頻度とリンクさせてみると、Aでは77.6%から55.9%へと減少しており、前期のAudioCD中心の使用から、後期にはCD-Romとしても頻繁に使用するようになった様子が伺える。一方、B大では前期が47.0%がAudioCDとして教材を活用していたが、後期には32.2%へと減少している。これは、前期から後期にかけて副教材のディスクをいずれにしてもあまり使用しなくなったことを示している。

## 役立ち度：A大学 CD-Rom 役立ち度

Rom役立ち度	1 大いに役立っている	2 ある程度役立っている	3 どちらとも言えない	4 あまり役立っていない	5 全然役立たず	計
2005前期	12	11	15	12	8	58名
	20.7%	19.0%	25.9%	20.7%	13.8%	100.0%
2005後期	11	25	6	5	1	48名
	22.9%	52.1%	12.5%	10.4%	2.1%	100.0%

## B大学 CD-Rom 役立ち度

Rom役立ち度	1 大いに役立っている	2 ある程度役立っている	3 どちらとも言えない	4 あまり役立っていない	5 全然役立たず	計
2005前期	4	15	10	8	2	39名
	10.3%	38.5%	25.6%	20.5%	5.1%	100.0%
2005後期	1	11	12	8	3	35名
	2.9%	31.4%	34.3%	22.9%	8.6%	100.0%

それでは、CD-Rom としてのこの教材はどの程度有用だと感じられているのだろうか。A大では、使用頻度の増大に伴って前期の39.7%から後期75.0%もの履修者が「大いに」あるいは「ある程度」役に立っていると答えている。一方、B大でも、後期の使用頻度は大きく下がって「時々」以上の利用者が20%を切っているにもかかわらず、前期では48.8%、後期でも34.3%の履修者がある程度は役立っていると答えている。

## 役に立った画面：A大学 役に立った画面

役に立った画面	1 基本画面	2 発音関連	3 練習問題	4 Ex連動	5 分らない	計
2005後期	2	18	19	7	2	48名
	4.2%	37.5%	39.6%	14.6%	4.2%	100.0%

## B大学 役に立った画面

役に立った画面	1 基本画面	2 発音関連	3 練習問題	4 Ex連動	5 分らない	計
2005後期	1	5	5	6	17	34名
	2.9%	14.7%	14.7%	17.6%	50.0%	100.0%

しかしながら、より突っ込んだ形でCD-Romに用意されている四つの画面（基本画面、発音関連画面、練習問題画面、Ex.連動画面）のうち、どれが最も役に立ったかという質問をしてみると（後期のみの設問）、B大では半数の履修者が「わからない」と答え、A大では発音関連画面か練習問題画面と答えたものが多かった。使用頻度が低ければ画面ごとの差異などは意識されにくいのが当然であり、使

用していくにつれてこの形での教材のメリットが見えてくるといことであろう。

使わない理由：A大学 使わない理由

使わない理由	1 面倒	2 役に立たない	3 内容難	4 操作難	5 パソコン苦手	6 使用環境整わず	7 必要性なし	8 その他	合計
2005前期	13	0	2	5	10	22	3	4	59名
	22.0%	0.0%	3.4%	8.5%	16.9%	37.3%	5.1%	6.8%	100.0%
2005後期	6	0	1	2	4	13	0	3	29名
	20.7%	0.0%	3.4%	6.9%	13.8%	44.8%	0.0%	10.3%	100.0%

B大学 使わない理由

使わない理由	1 面倒	2 役に立たない	3 内容難	4 操作難	5 パソコン苦手	6 使用環境整わず	7 必要性なし	8 その他	合計
2005前期	10	0	0	3	4	5	2	4	28名
	35.7%	0.0%	0.0%	10.7%	14.3%	17.9%	7.1%	14.3%	100.0%
2005後期	13	1	1	4	6	8	5	3	41名
	31.7%	2.4%	2.4%	9.8%	14.6%	19.5%	12.2%	7.3%	100.0%

では使用頻度が低かった履修者はなぜ使わなかったのか。複数回答可の選択肢に答えてもらったところ、前後期を通じてA大では「使用環境が整わないから」、B大では「面倒だから」がトップの答えであった。「使用環境が整わない」とは具体的には自宅にパソコンが無いことを指すと思われる。A大学には自由に使用可能なコンピュータが多数用意されているにもかかわらずこうした結果が出るのは、やはり本格的な使用には個人所有のコンピュータが必要ということであろうか。一方、B大学では「面倒」という回答が「使用環境」の問題を上回っていることから、CD教材の使用を自発的なものに任せてしまった教師側に責任があると考えられる。また、実数はそう多くないものの、「操作が難しい」「パソコンが苦手」という答えが双方の大学に見受けられ、コンピュータ利用教育の難しさも感じられる。

教材の選択：

A大学 Audio-CD/CD-Rom

Aud/Rom	CD-Rom	AudioCD	無回答	計
05前期	18	39	1	58
	31.0%	67.2%	1.7%	100%
05後期	27	21	0	48
	56.3%	43.8%	0.0%	100%

B大学 Audio-CD/CCD-Rom

Aud/Rom	CD-Rom	AudioCD	無回答	計
05前期	20	18	1	39
	51.3%	46.2%	2.6%	100%
05後期	18	17	0	35
	51.4%	48.6%	0.0%	100%

以上のような状況を踏まえつつ、最終的にこの教科書の添付教材として CD-Rom か AudioCD かどちらか一つを選ぶとしたら、という二者択一の質問を設けたところ、CD-Rom を選んだのは A 大で前期が31.0%、後期が56.3%。B 大では前後期ともに51%代と約半数が CD-Rom を選んだ。あまり具体的なメリットを実感したとは思えない B 大においても CD-Rom を選んだ履修者が多かったのは、同設問の理由回答から見る限り、学習する上で視覚的要素があった方が良いという理由によるものである。A 大では、取り扱いの気軽さ、簡単さから AudioCD の人気も高い。CD-Rom を選んだ履修者の意見では、やはり文章を見ながら聞けるという視覚的な要素の他に、クリック式の練習問題が用意されていることを挙げる回答が多く見られた。

C 大学との比較：C 大学のクラスでは、年度末にアンケートを行った。他の大学に比較してサンプル数が十分ではなくデータとしては一般性を欠いてはいる。しかし、この大学では Call 教室を通常の授業で用いることができる利点があり、そうした環境にある大学での授業の結果としての価値はある。一年を通して CALL 教室での授業を行って来たこともあり、AudioCD としての使用は7割が「あまり」もしくは「全然」使用しなかったと答えている。CD-Rom の使用頻度は「しばしば」あるいは「時々」使用したを合わせて50%であって、特に高頻度ではないが、役に立ったかどうかという設問では「大いに」あるいは「ある程度」役に立っているとの答えで100%に達しており、教材の選択では CD-Rom を選んだ履修者が8割であった。こうしたことから、一年間の授業によって他の2校よりもはっきりと、教材としての CD-Rom が定着したものと考えられる。

### まとめ

今回は、履修者がどのように受け止めたかという点に焦点を絞った為、学習効果についての考察は行わなかった。我々の教科書の目標は、厳しい状況にある第二外国語の授業を履修する学生が少しでも多くのフランス語に触れることができ、練習することができるようにすることであった。その為に、従来の CD やテープよりさらにキメの細かい反復学習を行うことができる教材を開発し、授業の補助、そして積極的な自習のための材料を提供したいと考えたのである。こうした意味では、まず最初のステップとして一定の効果を挙げ得たと考えている。

我々に対してしばしば為された質問に「なぜ CD-Rom なのか？」というものがあるが、まず第一に我々の現状において特別なシステムを必要としない（大学のサーバーなどを使用しない）、簡便なマルチメディア教材が必要だったということが挙げられる。すなわち教師の側も学生の側も「いま、すぐに」使用できる教材を提供したかったのである。また CD-Rom の利点として、教科書作成上の制限（ページ数や色数の制限、授業数を考慮した練習問題の数や難易度の平均化）や印刷物という媒体上の制約（インタラクティブ性、音声・画像ファイルとの柔軟なリンクなど）を比較的容易にクリアできるということも挙げられよう。

無論ソフトウェア的な問題が無いわけではない。現状の教材では、音声ファイルをプラグインとして画面に埋め込んでいる為、読み込み（画面の切り替え）に時間がかかる。また、最近の OS はユーザーに対して警告や確認の為にダイアログボックスを頻発する傾向にあるが、大学の CALL 教室などを利用する場合、管理者権限が無いとこうした無用の警告画面などをオフにすることができないことがある。我々としては、予想されるこれらの事態をサポートすべく、出版社の協力を得て専用のメールアドレスを開設したが、特に目立ったトラブル情報は今のところ寄せられていない。

むしろ我々の教材の根本的な問題点は、CD-Rom の内容を含めて、教材をどのように教科書本体と



リンクさせればよいのか、どのような授業デザインを想定しているのかを明確にせず、使用者の自由に任せ過ぎた点にあると言えよう。『パソコンでフランス語, Ouf!』(1997)において澤田肇氏がすでに指摘しているように、「学習プログラムの中での位置づけがされていないし、授業の方法論的解説もない(中略) 具体的ガイドラインも与えずユーザーの試行錯誤にまかせる<sup>5</sup>」点が、この手の教材が多く陥る問題点であり、本教材もその誹りをまぬかれ得ない。事実、授業の中で実際に付属教材を使用した時間の多かったクラスで、より具体的な利用効果が実感されている。授業そのものにおける使用と授業外での予習・復習としての使用を明確に区別することはできないが、我々としては授業において十分にフォローすることができない部分を重視すべきではないかと考える。また、現在の外国語教育におけるマルチメディア利用の方向性を考えるとき、従来の授業という枠組みを超えて、学習支援システム的な方向へと向かっていることは否定し得ないと思われる<sup>6</sup>。だからと言って、一部の大学でしか運用の難しい巨大システムがなければ語学の授業がなりたない訳ではないと考える。我々の試みはそうした現状に対してマルチメディア教材の可能性を探る試みの一つであり、その有効性や限界をさらに見極めた上で、方法論的な方向性やガイドラインを設定する必要があると考えており、さらに継続的な活動を行うことによって様々な問題に対処していきたい。

#### 註

<sup>1</sup> 熊本哲也、辻野稔哉著、『カドラージュ』 Cadrage、駿河台出版社、2005年発行。この本は、フランス語入門用の教科書であり、紙面のテキスト部分を移植した CD-Rom を添付している教科書である。この CD-Rom 上には、HTML 形式で紙面のテキストの「基本画面」に加え、発音と綴りの関連をビジュアル化した「発音関連画面」、簡単な選択形式の練習問題の「練習問題画面」、紙面の Exercice のページに関連した「Exercices 連動画面」を載せている。HTML 形式なので、インターネット用ブラウザが起動可能な Macintosh 製のパソコンや Windows 互換機に関係なく読み取ることができる汎用性がある。また、一般的な教科書にあるように、通常の添付オーディオ録音 CD としても使用が可能で、市販の CD プレイヤーでも教科書の発音を聞くことができる。

<sup>2</sup> 同様の報告は数多くあるが、特に日本フランス語教育学会2004年度秋季大会における「問い直されるフランス語学習の目標」と題されたシンポジウム報告は、問題点を具体的に指摘しており注目される。田中幸子、小林正巳、太原孝英、善本孝、塚原史各氏による報告。『フランス語教育』33号、日本フランス語教育学会、2005、pp.113-126。

<sup>3</sup> 旺文社ムック『大学の情報力』、旺文社、2000。

<sup>4</sup> 代表的な教科書として樋口淳他、『こんなくと フランス語文法—CD-ROM 活用版—』、白水社、2005 が挙げられる。

<sup>5</sup> 澤田肇、「マルチメディア時代のフランス語教育戦略」、霧生和夫他、『パソコンでフランス語, Ouf!』所収、駿河台出版社、1997、pp.77-78。

<sup>6</sup> 住政二郎他、「From CALL to LMDS:OSS を活用した外国語教育・学習支援の新しい方法」、『コンピュータ & エデュケーション』19号所収、CIEC、2005、pp.19-24。ここに示されたような LMS (Learning Management Sysem) の考え方に基づく英語教育の e-Learning の在り方は、英語以外の語学教育にとっても示唆に富んでいる。